■今月の特選句

2016年6月

古々米に飽きて穀象這ひ出せり　飯塚ひろし

「古々米に飽きて」は科学的な根拠が乏しいが、作者自身が穀象だとすれば納得。擬人化は対象になり切る、または対象に自己投影すること。

矢車や濁音増えし風の音　奥脇弘久

矢車が風音を濁らせたとする詩の心がよろしいですね。選者も挑戦。「澄む空を尾で混ぜ返す五月鯉」　「風飲むに飽くことはなし鯉のぼり」。

ファスナーに三度も噛まれ四月尽　原田　曄

癖の悪いファスナーは、誰かと同じで責任を転嫁するから宥めて褒めて使うこと。盗作します。「ファスナーに噛みつく癖や四月尽」。

一番と二番を混ぜて春の風　森岡香代子

愉快なことですね。もう少し観察して、「一番を追越し春の二番かな」「追越され二番となりし春疾風」「混ぜ返し御免と詫びる選者哉」。

お辞儀する工事看板春疾風　田村米生

ヘルメットを被ったオジサンが頭下げてる絵の看板は、日本の工事現場の原風景じゃな。わびさびの風景と言える。「春雨にさびたる詫びの立看板」。

お別れを何度言うたか古茶を汲む　柳　紅生

ゆったりとした時間の流れに古き佳き日本があります。お腹が、たぷたぷになりますね。その結果として、「古茶を汲む合間合間の御手洗ひ」。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

■今月の秀逸句　（・・・七七をつけてみました）

買ひ取りが増えるぞ取るな潮干狩　伊藤浩睦
・・・取っても海に戻せばよろし

・・・黄砂難民行き場はあらず　金澤　健
子と孫をコインでつなぐこどもの日

思い切り殴ればよかつた四月馬鹿　飛田正勝
・・・殴れぬこその腐れ縁とも

・・・そんな奴には古茶でかまわん　井口夏子
胴回りきつくなりたる更衣

太るのは夜半よ独活（うど）も人もまた　加川すすむ
・・・独活に肥料を夜やつちや駄目

・・・予定変更戻り慌てる　有冨洋二
浦島草さては私を釣るつもり

地ビールの泡に咲きたる地元色　山本　賜
・・・泡は吹くもの咲くもんじゃない

・・・良く見りや人の顔をした蟻　壽命秀次
お手すれば犬に咬まれる四月馬鹿

まあこれが新社員かや半年後　西をさむ
・・・泣き落したりため口きいたり

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

地ビールの泡に咲きたる地元色　花岡直樹
・・・泡は吹くもの咲くもんじゃない

蟻の列連休あけて動き出す　津田このみ
・・・良く見りや人の顔をした蟻

お手すれば犬に咬まれる四月馬鹿　久我正明
・・・甘咬み知らぬお馬鹿な犬ね

まあこれが新社員かや半年後　田中早苗
・・・泣き落したりため口きいたり

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

■今月の滑稽句

	もったいない昭和一桁更衣	青木輝子
	更衣女にひそむ妬みかな	青木輝子
【佳作】	あの世へのガイドはいない道をしへ	青木輝子
【佳作】	白き胸あらはに見せて残る鴨	青山桂一
	天空にほほゑみかはす鼓草	青山桂一
	ともかくも姿きりりの黄水仙	青山桂一
【佳作】	河豚供養して両足の痺れたる	赤瀬川至安
	息子からサラリー貰ふ四月馬鹿	赤瀬川至安
	子には似ず数学不得手桜散る	赤瀬川至安
	曇天の花ぽつちやりと重かりき	秋月裕子
【佳作】	真青は宇宙の色か夏が来た	秋月裕子
	晩春の苔が泣いてるしずくかな	秋月裕子
	小さきほう包み竹の子おすそ分け	有冨洋二
【佳作】	花過ぎて嵐の予報気にならず	有冨洋二
【佳作】	三つ褒め二を諭し子どもの日	飯塚ひろし
	少子化や村に一つの鯉幟	飯塚ひろし
【佳作】	去る人を追ってゆくかに野火走る	井口夏子
	でめきんをでめとでめとで笑ひあふ	井口夏子
【佳作】	一枚二枚そこまで脱ぐや春盛り	池田亮二
	恋患い内科小児科精神科	池田亮二
	桜湯に入って行けといはれても	伊藤浩睦
【佳作】	法螺吹いて引くに引けない通し鴨	伊藤浩睦
	喫煙の肺に二対の棕櫚の花	伊藤洋二
	母の日は妻が夫を労わる日	伊藤洋二
【佳作】	人生は捨てて立つ瀬の竹落葉	伊藤洋二

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

	日曜は曇りのち雨土筆伸ぶ	稲沢進一
【佳作】	竹の秋逢はねば人の老いにける	稲沢進一
	山頂はまだかまだかと登りつつ	稲沢進一
	ゴールデンウィーク日本列島渋滞す	稲葉純子
【佳作】	求めればつるりとかはされ冷奴	稲葉純子
	無心に這ふ蟻に学べず生き方を	稲葉純子
【佳作】	風ありて休む暇なし鯉のぼり	井野ひろみ
	心経の覚へきれずに二度遍路	井野ひろみ
	ほかほかのジャガイモ皮の癒着剥ぐ	上山美穂
【佳作】	花粉症かも鶯のほけっきょん	上山美穂
	女王蜂気分やれんげの首飾り	上山美穂
【佳作】	動くもの水馬だけ過疎の村	氏家頼一
	蟻一つ覗いて素通る蟻地獄	氏家頼一
	タンデムの女先頭濃紫陽花	氏家頼一
	攻撃の天賦の才を子蟷螂	梅岡菊子
【佳作】	産院と知つてか燕巣をつくる	梅岡菊子
	敬老会昭和を断舎離できぬまま	梅岡菊子
【佳作】	草矢とて昔ほどには届かざる	越前春生
	猿猴のあくびもらひぬ四月馬鹿	越前春生
	遊行して春や男は堕ちやすし	越前春生
	梅雨晴に腐る心を干しにけり	岡野　満
	そよ風のリズムで踊る若葉かな	岡野　満
【佳作】	緑風や男一匹恋に泣く	岡野　満
【佳作】	吾輩は猫であるその曾孫の子猫	小川飩太
	春愁医者に掛かつて悪化する	小川飩太
	筍や真直ぐ伸びて吾のやう	小川飩太
【佳作】	鯉幟腹の底まで見透かされ	奥脇弘久
	風を受け川面を泳ぐ緋鯉かな	奥脇弘久

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

	竹の子や争族煽る不発弾	加川すすむ
【佳作】	初鰹トリプル季語に味を占め	加川すすむ
	春愁や近視難聴うすら呆け	笠　政人
	道問へばぶつきらぼうに葱坊主	笠　政人
【佳作】	金輪際通さぬ構へ蟇（ひきがえる）	笠　政人
	艱難に玉ともなれず花は葉に	金澤　健
【佳作】	もくもくと子ども湧き出る子どもの日	金澤　健
【佳作】	小形犬抱き上げ桜嗅がせをり	川島智子
	花吹雪輪舞となりて坂まろぶ	川島智子
	楸邨と守一の蟻コラボせり	川島智子
	川底のタイタニック号花筏	久我正明
【佳作】	大海に出れば密航花筏	久我正明
	酒蔵にとぐろ巻きたき青大将	工藤泰子
【佳作】	沓脱に巨大百足虫と大靴と	工藤泰子
	車前草のカラーコーンを逸れて咲く	工藤泰子
	おちゃびんに少し兆しが木の芽時	小泉花子
	吾が花見清遊などとは言い難し	小泉花子
【佳作】	ケチョと鳴く度うぐいすの尾の上下	小泉花子
【佳作】	住みにくき世とも知らずに蝿生る	小林英昭
	お手軽に使うて便利春の風邪	小林英昭
	むかうにも野暮用ありと鶴帰る	小林英昭
	早苗箱庭にて育て機械植ゑ	佐野萬里子
	志摩サミット芽吹の雑木規制せり	佐野萬里子
【佳作】	半島の端の端まで田水張る	佐野萬里子
【佳作】	マスカラの顔に驚く牡丹かな	下嶋四万歩
	父の日の肩凝りに貼る湿布かな	下嶋四万歩
	歯の抜けし話詫びしや花は葉に	下嶋四万歩

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

【佳作】	乙女等の一心不乱春の紅	壽命秀次
	電線に盛る雉鳩忙しなし	壽命秀次
	幹事役下戸に任せて花の宴	白井道義
【佳作】	子離れの出来ない母や子猫抱く	白井道義
	四択のマークシートや入学す	白井道義
【佳作】	排ガスにむせぶ躑躅や環状線	鈴鹿洋子
	暮の春地球の割れる震度七	鈴鹿洋子
	どこまで若返られるスニーカーの紐しめる	鈴木和枝
	十五年上の姉と長電話	鈴木和枝
【佳作】	随分歪んだ顔だことスプーンに言われ	鈴木和枝
	桜の姿色鮮やかに支所に咲く	鈴木哲也
	春の日々資格テストに無我夢中	鈴木哲也
【佳作】	散歩道たんぽぽ見つけ話してる	鈴木哲也
	少年に選挙権有り子どもの日	髙田敏男
	黒猫も祝いの席に端午の日	髙田敏男
【佳作】	風きまま骨抜きにされ鯉のぼり	髙田敏男
	ルンルンとルンバにまかす春埃	高橋きのこ
【佳作】	逃水に負けてはならじハーレーダビッド ソン	高橋きのこ
	強風に鯉たたまれて子どもの日	高橋きのこ
【佳作】	人を寄せつけぬ読書の遅日かな	田中　勇
	ラジオから目からうろこの目借時	田中　勇
	行く春の飛鳥路を巡りたりけり	田中　勇
【佳作】	山笑ふもどけつ放しの脳回線	田中早苗
	豊食（飽食）は蜥蜴までにか丸まると	田中早苗
【佳作】	ごま摺りは一人前の新社員	田村米生
	花見バス帰りは虎を乗せてをり	田村米生
	山笑うわたしも笑って過ごしたい	津田このみ
【佳作】	山笑うこのまま笑って済むものか	津田このみ
【佳作】	風まかせおれもなりたや藤の花	土屋泰山
	サラリーのおあづけ食らふ夕蛙	土屋泰山
	万緑やおじさんの夢背中おす	土屋泰山

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

【佳作】	そんなことあつたかなあとこどもの日	飛田正勝
	犇きて小家の登る山笑ふ	飛田正勝
【佳作】	梅雨晴れ間今日も一本忘れ傘	中井　勇
	初ホタルあんたのお腹に投げキッス	中井　勇
	雨蛙ゲロゲロ明日は傘がいる	中井　勇
	やいのやいのと連れ出されたる桜かな	新島里子
【佳作】	おつとどつこい花のベンチに犬の糞	新島里子
	いぬふぐりその名に恥ぢて小さく咲く	新島里子
【佳作】	徳島の踊り上手な踊子草	西をさむ
	捩花の捩じつてみたき捻れかな	西をさむ
	背景は屋根か甍か鯉のぼり	花岡直樹
【佳作】	こどもの日昔に帰り休肝日	花岡直樹
【佳作】	春のねこ売られる喧嘩売る喧嘩	原田　曄
	涅槃して編み籠の上の春大根	原田　曄
	地虫出づブルトーザーの大仕事	ひがし愛
【佳作】	急坂を物ともせずになめくぢり	ひがし愛
	人よりも勝るや蜂の記憶力	ひがし愛
	老婆の爪きんきんらきんに山笑ふ	久松久子
	お日様から無料の電気記念の日	久松久子
【佳作】	毛虫とて流行の的モヒカンに	久松久子
	春暑し営業鞄のふくれきり	日根野聖子
【佳作】	苗にして匂ひは既に青トマト	日根野聖子
	四月尽机上に飲み忘れたる薬	日根野聖子
	卒業歌田舎駅発つおてもやん	藤岡蒼樹
	素つ裸ライトアップにくねくねす	藤岡蒼樹
【佳作】	竹の秋床屋で愚痴る若白髪	藤岡蒼樹
	この頃は猫と朝寝がしたい人	藤森荘吉
	朝寝するわが愛すべき怠け癖	藤森荘吉
	かくなればこつちの世界朝寝かな	藤森荘吉

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

	往きはよいよい風薫るふる里へ	藤原セツ子
	三人が同じ柄シャツ春麗	藤原セツ子
	モコモコのなんじやもんじやに見おろされ	藤原セツ子
【佳作】	むせぶよな若葉の香り腹一杯	細川岩男
	五月雨や強き雨ゆえ傘をさす	細川岩男
	陽を浴びて繁る若葉や羨まし	細川岩男
	子どもの日この餅力つくんだね	松井寿子
	都会の子に見せてやりたし麦の秋	松井寿子
【佳作】	ついばむを鳥と争いさくらんぼ	松井寿子
【佳作】	春愁ひ付き来しスーパー便座まで	松井まさし
	逃水に白髪の浦島溶けてゆく	松井まさし
	陽炎に幼女老女の出入りかな	松井まさし
	われ武蔵(むさし)鼻をかすめてつばめ飛ぶ	三橋百笑
【佳作】	道草を子らにさせたし桜の実	三橋百笑
	鼻欠けの地蔵に集ふたんぽぽは	三橋百笑
	白南風の伊予の訛りの「だあーんだん」	南とんぼ
	緑陰に猫伸びていてつついてみて	南とんぼ
【佳作】	会う度に吾名聞く母花は葉に	南とんぼ
	メーデーのSOSに相似たり	百千草
【佳作】	草餅食ぶ時の扉の開くごと	百千草
	金鳳花子の成長に追ひつけず	百千草
【佳作】	麦の秋頬を刺したる猫のひげ	森岡香代子
	花は葉に化粧を落としモノトーン	森岡香代子
	ニセだとて嘘のない白アカシアは	八木　健
	来客の出入りに突かれ手鞠花	八木　健
【佳作】	孤独専用濃い色のサングラス	八木　健
【佳作】	薫風を芝に蹴ちらす競走馬	八洲忙閑
	時の日の零時十二時二十四時	八洲忙閑
	風天の故人となりて根無草	八洲忙閑

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

	二枚目でない馬刀貝を誘い出す	八塚一青
	にじみでる貝の涙やしじみ汁	八塚一青
【佳作】	楽しみはカミングスーン花苺	八塚一青
	菖蒲湯の皺にて伸びる生命線	柳　紅生
【佳作】	父の日の期待されたる倍返し	柳　紅生
	雨風の生みし風情や桜敷	山下正純
【佳作】	ポップコーン弾けるように桜咲く	山下正純
	綻ぶにひと日を余す桜かな	山下正純
	おや猫子猫餌まく人の後追いかける	山本けい子
【佳作】	花屑を一網打尽掃除機は	山本けい子
	散りそびれたる花の一枝明楽寺	山本けい子
	人まえでばさりと落ちた白椿	山本　賜
【佳作】	シネラリア十七才のよその猫	山本　賜
	義歯と義歯ぎしぎしキスす	横山喜三郎
	裸婦像の窪み凹みへ雪解水	横山喜三郎
【佳作】	ほうたるは村政の具となりてをり	横山喜三郎
	餖飯やしぶとく生きて箸洗ふ	吉原瑞雲
【佳作】	更衣へて禁句となれりどつこいしょ	吉原瑞雲
	花の酔い散らせるほどの財もなし	吉原瑞雲

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。